

●水環境・湖沼（4） （1-B-15-3～1-B-16-2）

本セッションでは、霞ヶ浦の溶存酸素変動の解析に関する発表が2題、猪苗代湖の水質観測・考察に関する発表が1題、伊豆沼水質変動に関する発表が1題なされた。

1-B-15-3では、霞ヶ浦の北浦を対象とし、流動場-生態系混合モデルを用いて、成層形成メカニズムについての数値シミュレーションを行うと、成層化の正確な予測が可能であることなどが報告された。底泥からのリンの溶出モデルについて、生態系モデルの改善についての質疑がなされた。貧酸素水塊は漁業・水産業に多大な被害を及ぼすために対策を講じるために、今後の発展が期待される。

1-B-15-4では、霞ヶ浦の成層水の貧酸素化の動態把握と予測を行うために、現地観測と室内実験を行い、貧酸素化の予測では水温分布が重要であり、成層化が持続すると貧酸素化する可能性があることが明らかになったことが報告された。また、貧酸素化は特定の場所で起こるわけではなく、湖面近辺での風（風向・風速）も関与している可能性も示した。有機物分解が溶存酸素消費速度に与える影響について、水の密度の空間分布などについて質疑がなされた。

1-B-16-1では、猪苗代湖の水温・大腸菌群数・pH・クロロフィル等を測定を行い、5～8月ごろまで成層を形成し、その後、部分循環期・全層循環期へと移行すること、北部水域では夏期に底泥の巻き上げによる水質の悪化・大腸菌群数の増加がみられることなどが報告された。クロロフィルの分布やpH中性化の原因についての質疑がなされた。

1-B-16-2では、宮城県北部の伊豆沼畔の水鳥給餌池の水質をおよそ2年間に渡って測定した結果、SSやCOD、大腸菌群数は水鳥の飛来数が多いと増加する傾向があり、鳥インフルエンザの影響で給餌を自粛したため飛来数が減少した2008年11月から2009年1月にかけては著しい増加はみられないことを報告した。給餌を自粛したことで伊豆沼周辺全体の水鳥の飛来数は減少しているのか、給餌池の水の出入りなどについて質疑がなされた。

（岡山理科大学・理 宮永 政光）